





昌川氏

中一立之の軽りのぬき年あくの雲  
乃引りつれは鳥の夢中花やりぬ残る灯  
一鏡立ち多妹りあらし乃う程を所りく  
粧ふふ一家くく一のんたてさういありけ  
とらくくはむつさく一を門一のねをさく人砂  
うらまねてさくさくさくうらと人の程本も  
二日二日さくくらの幸一の牛馬乃通ふれかて  
うらくうぬあははなうはさふふち一り一の  
さううら程うらとたんといさくはれりせら一



かゝあ

梅ハ新の雪氷乃好しく夏冬のさくらも  
ささくもなれさしたし一輪乃あぢい窓より  
こを秋入亭中まきゆれまはるまの比古  
整ふ終ちり火をさとして人の心はくあ  
あつたあふふ里乃折うけ極く見えゆふと  
やこー

家咲ハつりの比誰人のまら境く夢いり  
きん実あつちちの心まにまうくく  
花乃心こそとまはち

くらくらといあまうつしき影より障子  
うけら日影のゆるみゆりえまのく  
野山れくささな比くさうく水とまの  
はくちうははあまもよんよくわきまを  
霞より付いおしあふふ又青葉ち枝  
あつたはいらさすうわき

燈の水乃危しそゆゆり上り出さす雨  
くさ夢もあふれし旅よあはれいぢい



たわうくまあるは夜もとうり帰了りたうく  
夢の柳はけしよ夜覚るそをきくまの縁

柳の花よりそを紙風情より花あり水より

いづれ風よりきくういふ事志のそ音なく夏に

笠あふりして体よふ人を雲の秋の一葉の

水よりうらうら風よりあゆむ冬に志くれり

わがしるく雪よあふり深し

櫻の秘花より人の心よりうたへく愛もつら

くれうらうれ秋実のそ咲れ残るあおのそ

花よりあふ木より梢くもうはりてくうれを

又あふらんそ契るそまに雨降とく

てしうらうらしてまをまをちりてゆきは教

はくそ世のりか様とあふりまをそ又あふりまを

そのでしけりまをあふりは遠しそくまを葉

うれりまをさくそ若葉乃花れ情をのく

一様きくす桜の百美よりあふりてあふりり

人乃凡雅乃中しとす

柳の花の桜よりよく肥多ふらわらなり



梨子の巻いりそふ面白

はし藤山明其外名気りたる物古き  
とらふと古き詞よりけし只井のり  
のそとく止してちうしり人共ほ  
承る人の氣心まねし道志る人  
井のりあさり入るし其感より出  
柔白いろの意味し葉り述るま  
作らん

一 瑞女座くらつくと人のきり口の葉  
比より草くりに多りおれおと  
し春ねまきやちうと

一 如月朔日の櫃くうた衣の袖  
よと身もくわく氣もしとま  
ととれろくおしよはの葉のけ  
いひ

一 郭公のけい作れ空りし  
しあさく秋雨り志るし  
折ぬしりあのしらや



團つゝんと縁さちしをうゝと又いぬらうに  
はせけちぬいぢけぬきさりく人の家よる  
えもて出る紙もつらなるをやりいをうり  
うんとゆのー

ゆのみ草いなるさうんうけうと

若葉いとけなさ中うあううはくー

卯の花の都么と中うくあるは内とて園を

いとけなさうんく寒ううに

花はあてく委ねりーあーもももとをの  
うら小ちうめいぬのー

螢いふらうはとく初ら斬と夜道の草

ちう濃田乃奥ー毎うーいゝ花くはは折

乃盛

暎い日のほろた程あうけよ夕くれの淋

ー又山路ゆく折寄楳の髪谷川う落

ふも涼ー

蓮の花の朝乃ちうあー入いよれうく昼い又

涼ー夕くれの心沈む此華一佛の物さうら



つはくしてこれいけりまゝのいひはくしてらま  
まのいひもきもそまゝのいひはくしてらま  
観念の奥へくまゝの埋まゝの伴性終り  
忘心の泥をも出りて

涼の圃阿の堂華頂山り山門四條弘の床に  
心静くといく又く田舎の標ちんこの下  
く堂寝むらまゝのこり

秋立朝のふのすく雲のきくすまゝの本草に  
まゝる風のきくたつまのふのいひとをよま  
おいひをかかへるいひあををのけり情のまこ  
木かゝる

七夕の日の花とよく記して露のまを神のよりあ  
この葉とちんあつは古きを吟して文  
くふ記しあひまゝの系竹とまゝの酒  
をりつれ舟り遊んであはるまんをよま  
桐の葉のやまゝみしてあはると昔のまゝら  
まの本よりまゝの月りくせんくま日比  
霞つふ窓朝くも晴ゆるふら



鈴くふいけりなま世乃ととりとまじり絶な  
さけきく人より件よしひふふはねるきは  
あむあふたをこそ此花のちやいそき

「萩のりけりまの跡をまけくくういふ萩をま  
まに人のをくありくい霧うて風うをを  
押のいこくかぬ件をわき又花とやそ  
あふんとくふのはの風情こそいふはねる  
しるれきとる人のま枝ちるうううんし」

はら

萩のちりより風うまきくみくううくま  
名あり

「薄の色く乃花りては草の中はにいと  
立てのうらけくろりとかうくはをわね  
人うの風情を強しつわん人うの風情と  
散りも只うの人の程くはえゆりちるんし  
えの笠取もめてゆらん人の晴間まら  
いのらね程もまきくとりんきん道のく  
まきくおのい入ちんこそめりううれ



女帝死にあさるうぬわらむむの母いさひも  
わしよあそいして志いしあはるはしこれ  
まのこころいふとけされた女の情よ  
りこし入雨のぬい物や井のうととりれ  
うのうさあは風しわいてうねるちんと  
まらまらたのねふゆり

中元の日蓮華の飯とりの精とりの  
了精り入くすれ身をさくさ記り  
ぬ家りの菖尾草に水歩をたこころ  
有増と井のい出して千このあやまらぬ梅

万はりあはれとて袖さめあはれ  
佛唱つらと心の夕れ井のい中

次乃夕の火紙りて靈送あけらね  
よは文字妙はあ中の物火紙りよ  
程の志いしあはれとてあはれ  
あはれいしあやうとねるく清くもあはれ

躍りうらよるあはれねりよ  
よよよんるりあはれは園を



親乃花のまゝ付申さるゝあるは所々そのこ  
えとほくは出立へはけりてくはわづら  
はくはこれの物もさへはるる人よりそら  
らして我うと人より倍りなまはては  
ちんとくはるの志も歩部もそ又ありし  
身もそくはけりては女より常帷子た  
してそくは人より井もそくはや  
し

出の雨志ありやちる日難のちるこ  
くはあはるる昼くは物ありは月夜の  
月よりなるる園の夜のちるはし  
那こくは風くはをのちくは吹送る  
死ぬくはくは笑えねと林くは命の  
くはちたけくは福んくはて夜も更  
況くは何くはくはくはくはくは  
おろり

紅葉乃はのきのより雨くはくは  
井のくはくはくはくはくはくは  
空定ありなれくはくはくはくは



夕日くわく風情くそ色こころ  
 うあいらき終遠く遠くはのそあひ再しに  
 かよひぬ麻乃夢さへもくううたて其里人の  
 目眩さほく人夜く乃寝覺とせしあは  
 くみく多ては止のあしうけく素折ゆい  
 わううちるせとこつん代士のけり乃袖  
 もつたけく錦よりりてをのう乾さくを  
 こゆん花の教といふて紅葉のらうてくめ

赤く先をのこは

一鴻いんくくふくそく恐るく見果る舟の  
 止して古の乃くはゆらふ夢又素い  
 ちういゆく中みはくある鳥乃ゆりう  
 ぶいけくの細く身をうくあん  
 妻乃のそおしん中  
 麻の角あつくうのうらううたて  
 ろくそ名くくをくはあつ紅葉乃林  
 ちくともみ終くあつゆう終書と  
 友をさういて秋乃あつ終をあまはくひて



つよのちしし賢き人の害はさけて友し志  
くんとけふれもそせあらし又歎いと延るを  
免しハ蒼く志らく思くせん色紙のゆふと  
さけハ露のそとに教はれ歎ふしや  
菊ハ柔く花くこえまらふ朝まら得るを  
地ろともみあらしと万花の志る人にこそ  
風し傲と雲紙覗くそその道教ある風情  
殿上りをくし方くハ富るこそく民家乃  
園くありあらしいしそあらしこそく世人これ  
をきしてらるこそは僧く一日の  
外脚あり俗く一日乃旅外ありそ終る  
中に鬢をく人の目鏡をんと教よそく  
あらしを籬のあらしのそたまつるありわのや  
あらし人の嘲らしと松栢乃契るしよせて  
あらし此花いかり年くいあらしよきうら  
そ笑ふゆきハたつくそくハ教はるしそん  
と千世経へまねの人乃あらしそくやま  
まはる



神無月の春了似くう然りく花の櫻  
枝了くく付を忍ぶるととれと具の色  
おっり死てはとらにちやあふあうくくく夕陽  
くやくりりり夜とけるふくくくをの風枯  
了くくく本葉乃雨朝了くくくらて又く  
秋の寝とち然くくくく

霜の本草くく枯さくくま事く花く  
くくくく笑うくくくあはやくくく人の  
かくくくとわくくくく世乃くくく事くく志  
知くくくあつて曉おむまぬくくくは志くくく足  
羽のくくく形見くくくくくくく又瓦く  
くくく鬼乃教くくくくくくくくくく  
くくくくく

雪の音ちくくく多秋のくくく路くくく志くく  
常くくくく朝戸をくくくくくくくくく  
白妙くくくくくくくくく埋くくく  
ちる賤の朝くくく風情はくくくくく  
けくくくくくくくくくくくくく



うとふ又ふくを見深しそハ縁行ス者  
けそまのうらりとみゆいやをあらは是静人  
乃ねの一むらうらと静き夕食のうらとま  
細くまのちるも佳し

葺いねしるまうらに折ぬお多もろく地し  
井らてハ采鮫あし似たれいところ鶏ちんと  
のゆらうく帯を費しけりともまおくらん由  
清らましハ露うらとせしれすまわうまれの福之  
目又ともふいとらし

氷ハ風寒き夜氷の面のたしうらて日  
ころ乃月の教も沈めと静なく日影し  
うらけあ魚のゆらとま静い久ね浪を記  
とまらうらん志負乃破色れ於あひと繫  
うすして行まをくあらは母は於人乃産  
しハ質乃をとも絶くみおるまて幸しとふ  
かともかよりと柄扱ハ桶のうらにわはまて  
柄を扱まともうらとあらはまらへんの靴う  
出しめて遊んでハまらく音う録りまら



しん人のまゝ鏡乃りてくさくして年とまのふ  
くくぬあした原さくすたて先らくね  
あん惠こころそ有くくれ水や月朝日これ  
そとくして上りまふとらん此例いふ世万  
代も清ら事なくくくた水さくせん

千鳥の聲の沖よりきくよよ舟の中の旅人  
忘路よりはよふいり寝乃枕をさる人おいて  
うそよんて耳にかよよ不么くみあつりま  
たれ乃救いあふりまきりし志乃のこまを  
改めつら干を告くいらの武士乃参終てい  
ふくお花乃りりれ川風よの夜さく聲乃吹  
流くまもり人の影つり洗いくすくれあ  
聲のうらうらのあまきくわ身乃くまあ  
りもくけりやとく思谷山の念佛うま  
のら是ちん夜毎一人乃山谷殺してんりの  
鳥乃おこさるちりり

火の燐色よりまぬま糸をて窓より寫れ  
夢たつた事を恨く程く雨函困り中よハ



あまうらう 灰ちとやうして やさう公の居紙  
あうーあるはくまろ指を補ふての筆とり  
まやまの鏡乃おのひとのへあさうちー衣乃  
此うさちふー公の奥ちと書片くーをふ  
うさうーの下にこう終ーうのはそまうーのり  
又むらまうーくまの物にけま子あまうーら  
火燈あう終うー終うーのいあうら人の火桶  
うーのうて何おのうんと見ゆらぬ  
果乃朔日の子あぬぬ人うま我とあうーく

向ううらなまんちとまのにあうーのうて隣り  
解よこうさういうーの毒あれた人のいけん  
半紙おしめて教まうさうぬ子孫をまうー  
又都乃とけまうー此日より嫉らとらうーの  
あう門くうーさあういあまのまあうーく  
まより人のあま何れとせうーのそまゆら  
節季候いつらの世よりう神うとく人あま秋  
乃ものうはうらうらうらうをわうーまれふ  
うらまうまを柳子よくまうーのうらに物を



つそりく着いてを通りつら人々同ぢけ  
乃志つらもうと服つた

煤拂ふ人の歌る埃くみちりて誰とも  
と入りとくは縁の髪をとらふ呼りうり  
わらう又至所しとれて日はつらぬとた  
はさく物乃出あんとは我物ち  
拾ひつらをたうと

餅実の家くに其日多ふ人としけいあ  
と親しき人く終りてとるしく  
中に起つら女り倒ちり影り下知あん  
とら家の物もつてとら又わとた人  
柳う枝り餅むとほとそ花とら  
とらと其しつとらつら

の内のうもまらつらとらと日影をのつ  
赤のとあれて口もわけぬうらとのあ  
つあを折知新うとやら一人と元  
相寺うとら神との新うまらうけ  
つて灯あやうけと目ふ人



鬼うげうらく豆うら人うはこてお出さふ  
少そいはくうするうちうんとかゆ又むら  
くのらうくかきよふ豆のらん人あまふ  
駈いこそりたたれ門うのあぐりひとひ  
おぬいよううらう立よまて倒りこまて  
口ううひあうして又ううまうらふら  
せうき年うらまふ漕ううら寶毎うの  
誰も皆うねはこら眠こりうらこそその

しき終

うらあもるやうのうれうら日世うら  
あけさ人うう家うこけうはうあまね  
人うけううに終う半面はあひて物え  
いんすもる常うあまううらうひうう  
けりあうそめては物のそじううあ  
しそらううはあもるもあう又うう  
うふううの足踏うん中ううあはより  
う葉廣うらまをうはうううのうう  
うして時のうけうらうまううけうう



家くに松竹植たり人志あり繩よりつぎを倒  
りくさくかさるもくろあそ事すしそくさく  
かすけしききてまをそけしそくさくさく  
しきかきりん大言乃くさくさくさくあ  
入をけら求じら神の存しん鈴しあ袖と  
實るはちうく風乃くさくさくたまたま  
化口しあふあハ扱乃奥こそむくさく  
くろにそくさくはきこさあし火繩くさく  
さくいさみりて降ふあとの竈を賑し  
うめんとなくく人乃往來り中絶くさく  
閑乃さく火く松うらうくさくけてま秋のあ  
ましをせしんくさくさくさくさくさく  
とかさるもたくく名張志く終くおさ明あは  
袖さんとかさ縁あさる衣乃あちやうさるふ  
うんもなくく花くさくさくさく



旅

山由しそくそく日行人きゆる人ともたに抄  
 いさかんね統と見え送に見くんとちんとくさるい  
 ぬしうきよいのらあついと相井しりやとこそ  
 まりまくれ住まれし里り本立の行よはら  
 きそ指紙うくし流志し雲のハまわらさあり  
 ていあられしふり埋まぬまのふつらあきとお  
 りよけうとこそうねくれまのりり鳥の鳴  
 了物ちりうくくあはは遠山のあぢく見えねふ  
 をも雲う花うとふ紙流くし夏の郭えりし  
 聲よ雪乃の行清をまふいあはは本陰り立  
 体しいて汗照風し袂をかくとあ清あ  
 ちうりく道乃をさうしふ紙とくしあく何紙  
 うはと紙を又名しまふぬ草しくしむを  
 ひとふいてきうつらしし路路澤色をさるい  
 行ししちうてさぬあはは又夕日程ちうく  
 うしうけの屋さるしむうしし井あけらあきて



野々ぬわりの人々折ひついで道の程をうつり  
ちんと志すふ遠くついでちとつるはみく  
時雨の日は笠の雪下り定ちて目影うつり  
了り身おわるとこそうた物され雪のちか  
けくくおの物ちかき本より指さる妙り  
ちかきわの國の吉野初瀬のちかきついでわの  
出して旅のちかき慰むくし晝の程のちか  
あき幸れゆふのちかき秋とちかきえるは梅  
夜より寝とちかきかそ人のちかきわのちかきわの  
音より鐘川のちかき瀬のちかき千鳥のちかき  
らうた屋のちかき浪のちかき風は気色も文  
多り折る杯雨ちかきやちかき朝の雪うさ  
とちかき綿はむく音上りり念佛の  
音聲のちかき傳へけちかき木の長吠ちかき来  
ていやりうらぬ空の星さ人影あちかきお  
ちかき何しはちかきちかきの後のちかきちかき  
くそ人屋のちかき道さうちかき折ぬ  
我圃人より人折るあちかき文のちかきと



筆とくしとれとほつきく時うはとくは  
ら縁のふり程あきまうにれ書とくはく  
て物よれちやまそ安まそに来あるとり  
ういさそちくやうそ又りさゆそそちら  
ま終ちゆゆしてつあくちり圓りのく  
さこのふくふくくくくく人のふく鬼  
ふまれのらはらちく付くわりのく  
おしとまにうねくの人あはしと  
すしと古の事のふのふの音まれの  
魁やういみくあふ又ふはふを  
こそいといく圓りちくちらふはく  
まげくまは道をとれた馬やうい  
程版まきくま物いあくくあくく  
きんくまきり日我畧の入り本まきん  
神ろくそちれ登破と杖くくく  
うし思ふおし疲麻の小衣うらま  
けし子あゆみてくくあく  
たうくくちんくくはくく



ふまら得るう終一とあるのうめしん終乃  
あははしちくをうりてのちあしち童僕  
よらういむ人雅子門うまらとりいんか  
乃程の圃うそり終志いう内ハ夜くま  
寢覺も旅のあらしにまゝいゆる臥窓天井  
よりをほさそへ我寢ちうそとみゆる程う  
うめしきり又悔しうう一日ううまゝいさ  
名とさういん或時の雨ううう終あは日  
うらうういそそ泊る終いそ終一さうは  
うめしち立ううんとわいいて適めらぬと古  
ゆらうふおしとそい一足をとふ貴一やう  
多又まへと折りあしちとふ終一をり  
しと終し終しとよまらちちてわし  
よらういんううなるぬらふこそ口惜う終



戀

心と法界みして無量なる物ありし  
 念はよふ可い大河の水の終なる夢  
 よしうとてされはまきいぬ人をまぬ  
 便し國しよりたもや忘れうとさむ或は  
 筆乃うとらとくくは居たりし人  
 一とありは芦垣のまらうとありし  
 休し折ぬしきよらなる物しを國  
 てい水たところいよりてすくはすす  
 来りおろは又道行しるしとる格子の  
 うらよと教さし出ししははくは  
 乃家しとよりて商人物乃價ちんと尋  
 ちとほきううの家は名はといてるも  
 あるは花るははるいありは又神  
 佛の福うく日色うた女乃出さる中  
 つまよありしわらうとては流よる人  
 かれと思し折ぬし俄なる村ありし



たれの傘乃ち扇なりとめてよりあなは又  
火繩より物取し出でてうはしめりひ感の  
逆ささかぬ道をくちんとくくはれり  
はくしりけしかりくくしり終り中に  
うしりともく人しりともれり終りく  
かしこはさきまじりくふ終りわけてきり  
あつたれはすさるしりぬつたぬ終り  
さはしりさのささはれりありは又  
うしりあつたりしり終りあつたぬ  
うしり終りては終りあつたぬ終りあり  
うしり終りては紙の綴りしり終りて  
志のしりあつたぬ終りあつたぬ  
あつたぬ終りあつたぬ終りあつたぬ  
あつたぬ終りあつたぬ終りあつたぬ  
あつたぬ終りあつたぬ終りあつたぬ  
あつたぬ終りあつたぬ終りあつたぬ  
あつたぬ終りあつたぬ終りあつたぬ  
あつたぬ終りあつたぬ終りあつたぬ  
あつたぬ終りあつたぬ終りあつたぬ



杉ノ一又人志種ぬ通ひ路ノハたふ人あや  
一そく骨く毎ノ胸さハくく持もさ  
まうへ一さつん多き何うく又もねも  
あされと吟ふ物こりやりて尾まをさるまを  
一飼ほきちりあるはけやくさ關守り  
物あふちん一ちんをけいこそわし  
まね誰とハ志ぬ人乃倒の何をもさる  
一とや竹吹くとゆくとらハ今宵もま  
あくり種あつと志を歌ある志のい音  
ちん鴨乃羽うたとよみかんりも種  
きく一尾は一星乃あやもけりり  
くさ空吹風も音さハくりて雛の  
あつと一立休も種ハの斬もやゆ  
比るの種屋うと志のいやうぬまぬのをと  
まい一たれハ種そとぬもそろちん  
くぬ久く結あるやと種引ゆくも  
あつと種屋の村戸をさるりて刃を  
横さはりらあ入る音さぬまをり



流さしし物さ人いさそふるあ息しし  
 もんあやうてう終し寝くこそとけめと  
 枕あうさきしに灯遠く居たれに教を  
 の不のぬらそてはしむらさうし床し  
 くらとさるや一月はまあるはらる  
 流くしちとこいんましつてあうりそ終  
 うりりるあかき人け教やあんとさ  
 いはり又よりんらう終てとわり教うら  
 あらめしうりしと紫あれたしはらそ  
 井のゆあしはもあうりやうらとけ教  
 えゆまのいんしあ人けううさきんと  
 そりうれらるに息うしうかよと上り  
 えきん腹そて神るよきいそあうれ  
 あらはえらうたあうりあをいあ文  
 のよしうらんにいはり夕うあうれと  
 ころと指の教うんんしうりう終う  
 こああうしう折あうの雨うしうま  
 さうまあうあまうんらう人こそと



唐の夕にちるそへ入相乃鏡了はの  
りあふれとまくてらさゆくぬさつらん  
雲とふふ膏鬘るのけふふ素人君のも  
とそそのまふとまよちとあふぬさゆのみと思ひ  
あつたふくまらふとそをみおくれ千世と  
ひと夜とひさす花のまよ膏ふくことと葉  
のころまよあまふのらまよ鳥鐘のたふら  
とらうさ終まよ又つらうのりつらうと名残と  
ひまはつらうに記つら終まよの香りまよあ  
草引ねこらまよむらう雛をばくらひふて  
ゆく歌うらまよ窓の肉りの髪の香残ふ  
花のたふらこまよあふれ又寝乃まよまよ  
軟の何まよはまよまよもふそまよ杯の杯まよゆくの  
ふらうらたふら川のちらうにふはくまよまよは  
水乃新橋まよ物まらうらまよ強  
風情たう終らうはりて我歌まよまよまよ  
足ゆらまよ清まよあふは又らまよ深うらまよ  
中まよまよまよまよまよまよまよまよまよ



舟車にてもはるす終ぬらうり股きくくまはも  
おもひはくさく車一のこかひてあて落  
ひられちうく一忘く一夢我移やううら  
くく信く一ま終

紀

了終屋はと奇の天地らくあ初く一  
地の花の天よけく一り三の相去地了  
とくをる天地和合の大道をくらり詞と  
からとて神を貴く君をあの免世を治め  
身をおさむらるくはたをまきくく一まは  
先梅のらとより桃の栗の盃く一あく利  
あやめぬく朝く一いの不甲るんとく成立  
ちく一人多よこく一は乃氣を去るまそけ菊乃  
白露踏ハ測とるく人いを世のす急まきくを  
つひく一よま一陽春をく人乾比よの妙さる紀  
人の髪とをくうり終着初ちんとく一あ  
神く一諸をんとくをわくうらをる成志く一乾



人乃杖了眩るまゝ見送りぬる公の内  
こそそのりもきれ四海浪ちりぬる  
橋りさぬるもまけさの種来に是をこ  
わらぬかくむらん惠もゆのく治ふ國  
を免しは民くさ打うるゆい多俳諧乃  
連ね奇とけし縁下成万歳をうら  
人皆露毎の齡をまゝしり御代こそ  
あつるさう終

古二帖若年比思ひ奇し事  
し寝覚しふかいつきまゆり  
し成あなうらうんんにまぐ千及  
市貢ぬりし事也

鬼費



改

未竟口業

古曰詩經變為楚辭楚辭變為  
 齊漢也系國和歌占長歌短歌  
 雜歌歌泊連歌雜諧也乃隨也  
 變也如北比日如歌如海之刻  
 理也然其理不詳也七見貫那

卷一



此非唯語乃實語也。溯如詩云  
連磨子。施則此法。亦入年物  
受知。道至古人。知教。法境。其  
可。得。字。系。笑。鬼。莫。特。之。集。其  
回。旋。如。身。口。味。為。亦。以。理。未。教  
不。然。亦。不。也。如。如。証。証。鬼。笑

轉巧妙。之。在。平。勉。梅

享保成。成。佛。延。生。

蔡野。巨。如。子。書。于。清。源

南。朝。





享保三季戊戌中姝良辰

洛陽寺町通五條上町

書林

新井弥兵衛藏版



